

山と博物館

第46巻 第7号 2001年7月25日

市立大町山岳博物館

特集 大町山岳博物館創立50周年記念 特別企画
「齋藤 清の世界展」 8/4 (土)～10/14 (日)



爺ヶ岳

齋藤 清 画

開催にあたって

大町山岳博物館創立50周年特別企画『齋藤 清の世界展』を開催いたします。

齋藤さんは昭和17年に大町に生まれ、若くして木版画、水彩画、バステル画、ペン画などに取り組んできましたが、昭和52年、白と黒を基調とし、板面を細やかに削り出し、研ぎ出す独自の表現方法に到達しました。昭和59年、この独特の世界をひっきりとアメリカへ渡り、シアトル桜祭りに出展し、大きな反響を呼びました。世界でただ一人、齋藤さんが辿りつき、確立した美の世界が認められたのです。

以来、県内はもとより東京、横浜、京都、北海道など、全国各地で個展を開催する一方、画文集『季節のないカレンダー』、画集『やまやま』なども出版しました。平成10年、白馬村で開かれた「世界オリンピックポスター展」でのデザイン制作が仏人の目にとまるところとなり、招かれてフランス・アヌシー市でのホテルインベリアルパレス展を昨年開催し、高い評価を得ました。今回の特別企画展には、フランスで取材し、温めた新作も発表されます。

齋藤さんの作品には、風土に根ざした民家や暮らしのなかのありふれた風情、路傍の一輪の草花などを描いたものが多く、それらは観るものを「心の故郷」へと引き込み、やがてほのぼのとした懐かしさ、優しさで包んでしまいます。最近制作しはじめた、あそび心満点の流木や石ころのオブジェも同様です。

「何気ないものがおもしろい」と齋藤さんは常々言います。暮らしに寄り添う何気ない風物に込められた記憶……。それが一貫して齋藤さんが描こうとする世界の中心なのでしょう。

作品からは失敗の許されない集中力の苛酷さも同時に伝わってきます。その繊細で写実的な描写に思わず息をのんでしまいます。白と黒の世界。灰色から漆黒へ、その対極の眩しい白へと独特の世界が広がってきます。

郷土に生まれた画家、齋藤 清さんの世界をこの機会にぜひご覧くださいませよう、ご案内申し上げます。

市立大町山岳博物館

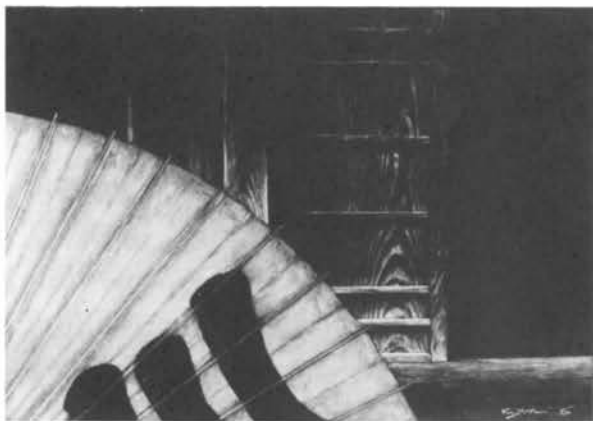
大町山岳博物館創立50周年記念事業実行委員会

マジシャン・齋藤清

中村辰治

1. 齋藤清は抽象画家である

齋藤清とわたしはこれまで8年間にわたる全国数十会場で「齋藤清の世界展」と銘打った個展を共に展開してきましたが、いまだにかならずといつていいほど個展会場で耳にするのが「写真みたいな絵」という、賞賛とも貶斥ともとれる観客のつぶやきです。繊細緻密に描きこまれた齋藤清の作品を、人はおおよそ「具象」の作品という括りで理解しようとするようです。しかしこれが「齋藤マジック」ともいえるべき彼独自のテクニクであ



傘 番

って、実は抽象画なのであります。こういうと齋藤ファンは、熱烈な方ほど首をかしげるかもしれませんね。どういふことかといいますと、つまり一見写真のように見える作品は、実は齋藤清という画家の、対象物の無駄をぎりぎりにまで削ぎ落とすという取捨選択の眼によって表現された、「観る」という意識が凝縮した果ての、そのエキスのことです。

大辞泉（小学館）によると「抽象」とは「事物または表象からある要素・側面・性質をぬきだして把握すること」とあります。

つまり作家が創造する作品に置き換えていいますと、写真のようにその場の情報すべてを画面に写し取るのが「具象」であるのに対し、情報の要素・側面・性質を取捨選択し、それらをさらにぎりぎりにまで削ぎ落とし、研ぎだして画面に表現するのが「抽象」ということになりますね。

人間の五感というものは非常に高度な能力を持っていて、眼であろうが耳であろうが自分の興味のないものに対してはその情報を意識の中に取り入れることはまずありません。たとえば1日に何十人、何百人という人の顔を見ても、関心のない人の顔はいちいち覚えられませんよね。ところがたとえ1億人の中からでも、一度関心を持った人の顔は恋心が芽生えるほど強く印象付けられるもので

す。あなたにも経験がおりてでしょう？

これが「抽象」の基本といえるのですね。

齋藤清の作品をよくご覧いただきたいのですが、事象の一つ一つは確かに細かな観察眼によって、あたかも写真のような質感をもつて描かれてはいますが、自分の興味のないものに対しては集中した意識が向いていないという、まことに独特の構成をもっていることにお気づきになることと思います。よくある抽象作品のように既成の形状を崩すことにはありませんが、観ているものだけにのびのびとみ、齋藤清はその部分に「意識」という凝縮された要素を表現し、それ以外の部分は一歩奥にひきこませる。つまりは主役と脇役の描き分けが明解なのだといつてもいいかもしれま



風

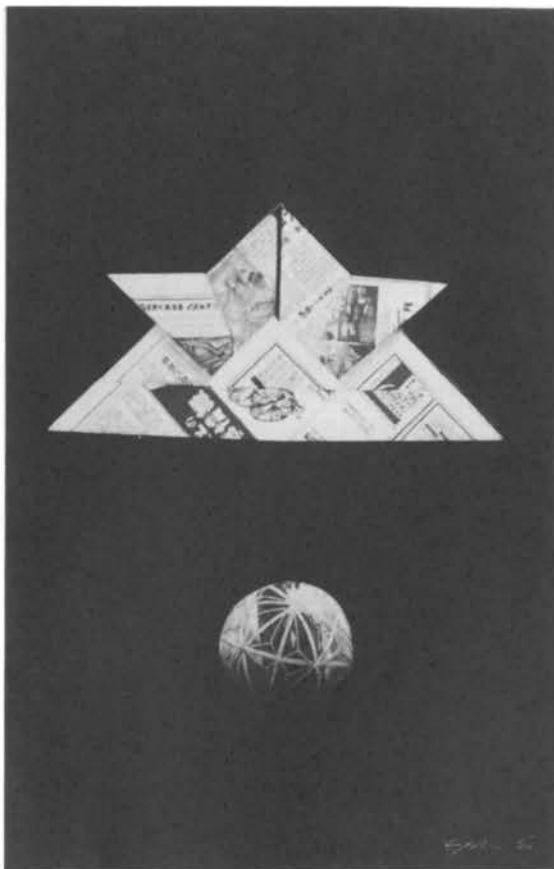
せん。「意識をもった眼」で画面を構成していくわけですね。

また、そこには観るという明確な意識を持った画家が画面には描かれることなく確かな存在感を持って存在していて、やがてはその画家が作品を観ている鑑賞者自身自身と同一化していき区別がつかなくなっていく……。そしてそれが合致したとき作品と観客、互いのエネルギーの交換は普遍性を持つようになっていくのです。これが齋藤清のオリジナリティであり、独自の「抽象」だと思ふのです。

2. 「マジシャン・齋藤」の

トリックが見えた！

わたしは、以前からこの「齋藤マジック」



端午の節句

はきつと人種、言語の枠をも越えたエネルギーを持っていくと確信していました。わたしは美術関連の仕事が続いている上で、作家、作品との関わりをもつ際に常に念頭においているのは、それが絵画や彫刻などの美術であれ、音楽であれ、また文学であれ、それを創作した人間の生がなるべくでてこないものであること。――つまり二重人格者であること。そして、その作品に触れる側の人間がもつそれぞれの性格、経験というフィルターをもつて接してくることに耐え貫き、観る側に様々な想像をさせてくれること。――つまり大うそつきであること。これらを使って観る側を自由にあやつるのが、齋藤マジックの種明かしです。

瞬間から、その作品は作家の手を離れて一人歩きを始めているのだということを申し上げたいのです。その時に、その作品に創った本人の顔が見えてしまうようでは、一人前ではないと思ってしまうからなのです。作品を鑑賞するということは、決して作家個人との関わりを探るのではないと思います。なぜなら優れた作家がすべて優れた作品ばかりを創っているなどということはあり得るはずはなく、駄作の方がむしろ多いからです。優作を生み出すことは、その作家の創作活動の中でもその何度もあることではありません。ですから、例えばある作品に感動した場合は、作家に感動したのではなく、その作品に感動したのだということを意識しなければならぬのだと思います。飽くまでも作品そのものと鑑賞者がどうコミュニケーションできたかというところが一番大切なことなのです。

偶然個展会場に足を踏み入れて初めて齋藤作品を観たと思われる方に、「作家の方は会場にいらつしやっていますか?」と聞かれ、齋藤を指差してあの方がご本人ですという、たいへいまず意外だという表情をされる場合が多いんです。齋藤の容貌はごく一般的ななどこにでもいる日本人でしょう、ご存知のとおり。その齋藤本人の容姿を知ると、この人がこの繊細な作品を描くのかと、驚かれるようなんですね。どうもわたしたち日本人は作品の表情と作家の表情が一致することを、無意識の内に望んでいるようなところがあるような気がしませんか? 繊細な作品を創る作家、それと同じように繊細で神経質そうな顔立ちをしていて、なるほどと自分で納得するのでしょうか……。



しゅんらん

3. 「マジシャン・齋藤」フランスへ
昨年、齋藤は初の海外個展を開催しました。ジュネーヴにほど近いフランス・ヌーシャターにあるインベリアル・パレスホテルが会場でした。ホテルといってもそこいらへんの宿屋ではないんですよ。いろんな国の要人が宿泊する桁外れの公式の場でした。日本でもかつてボルドーの橋本が泊まったとのこと。だから当然フランス人ばかりではなく、様々な国籍の人間が集まるところでひらいたわけです。

齋藤も最初はどれくらいの人を観に来てくれるのだろうかと不安だったらしいのですが、300人をゆうに越しているであろう会場のざわめいたオープニングの状態を見て、彼はただちに好調なスタートを察知しました。外国の人はとても積極的で、どんどん齋藤に話しかけてきたそうです。通訳はつけたのですが、来客の方は齋藤本人に聞きたいので、齋藤は笑みを浮かべながらただただうなづくのみ。がんとして日本語しか話しません。

でもなんといつても、同じ生きている地球人どうしです。

オープニングから時間が過ぎて落ち着いてくるとなんとなく相手の言いたいことが想像できるようになってくるんですね。通訳を介



マッターホルン遠眺



バン焼小屋

して話を聞くと、日本での個展会場で来客が反応する内容とまったく変わらなかったと齋藤は語ってくれました。つまり、作家がだれということではなく、作品そのものに表現された情感に感動したというものがほとんどだったのです。

「わたしは日本の草履や板塀は知りませんが、なんだか自分がこどもの頃に身近かにあったものたちにとてもよくニュアンスが似ています。……ついふるさとや亡くなった母親のことを思い出してしまつて」とハンカチで目頭を押さえる人など。まさに国境を超えてしまつたのでした。これは来場者が齋藤清を知っていて作品と対峙したのではありません。彼らが感動した作品が、たまたまそこにいた齋藤清という日本人の画家が描いたものだっただけ

にしか過ぎないのです。なんの前説もなく、彼らは素直に作品に感動したのです。これこそが齋藤が願っていた反応であり、今後の創作活動への自信となったのです。

今回の「大町山岳博物館創立50周年記念の個展」では、それらの再確認のうえに立って、さらに新たな表現方法、モチーフを織り込み、次へのステップをあがった証となる作品が数多く発表されるに違いありません。「山(岳)博(物館)」では2回目の個展となるわけですが、七変化の齋藤清ですから、きっとまたまた新しい作品が登場することと思っています。

「マジシャン・齋藤」の山博ステージに乞うご期待！
(アート・プロデューサー、株式会社七彩社)

齋藤清 略歴

一九四二年 長野県大町市生まれ
一九八四年 東京展、以降毎年全国各地で個展
一九八九年 画文集『季節のないカレンダー』出版
一九九二年 画集『やままゆ』出版
二〇〇〇年 フランス・アヌシー・インベリアルパレス展
二〇〇二年 第5回東京日本橋丸善展予定 1/20-1/26

人事異動のお知らせ

平成十三年七月一日付で元文部科学省登山研修所所長の柳澤昭夫が社会教育指導員兼山岳博物館専門指導員として当館へ着任いたしました。

山と博物館 第46巻 第7号	
発行	二〇〇一年七月二十五日発行
〒	長野県大町市大字大町八〇五六一
市立大町山岳博物館	
TEL	〇二六-一二二一〇一一
FAX	〇二六-一二二一〇一一
印刷	大系タイムス印刷部
定価	年額一、五〇〇円(送料共(切手不可))
郵便振替口座番号	〇〇五四〇一七三三九三